

第4章 考 察

筑後市内における縄文早期遺跡

筑後市内における発掘調査事例は近年立て続けに行われた圃場整備事業に伴い急激に増加し、150例を超える調査数を数えるほどになっている。この中で縄文早期の遺跡としては、早くに報告がなされた上北島の裏山遺跡が知られているにすぎない。ここでは市内で調査が行われた縄文早期の遺跡について紹介して行きたい。しかしながら落とし穴遺構のみを検出した遺跡については時期の断定ができないため、今回の報告の中から除外している。また、多くが整理作業中のものであり、内容は概説程度に止めておく。市内の縄文遺跡は八女丘陵の南、矢部川により形成された扇状地上に集中する傾向を示している（Fig.68・69）。これは近隣の八女市にも言える特徴であり、早くから多くの研究者によって指摘されてきたことである。一方、標高7m以下の低湿地地帯では、現時点では調査例が少なく、同時期の遺跡を見ることができない。

1) 裏山遺跡（上北島裏山遺跡）

筑後市大字上北島字裏山に所在する裏山遺跡は、筑後市・南筑後地域を代表する縄文早期の遺跡として有名であり、昭和41年（1966）に調査概報が出版されている。しかしながら、その後の諸事情により本報告がなされないまま現在に至っている。

裏山遺跡の発見は昭和29年（1954）に遡り、岩崎光氏により行われている。正式な調査時期は不明だが、このときは柱穴、石組み炉（概報では敷石炉）、押型文土器、打製石器、石鏃、石棒が出土している。

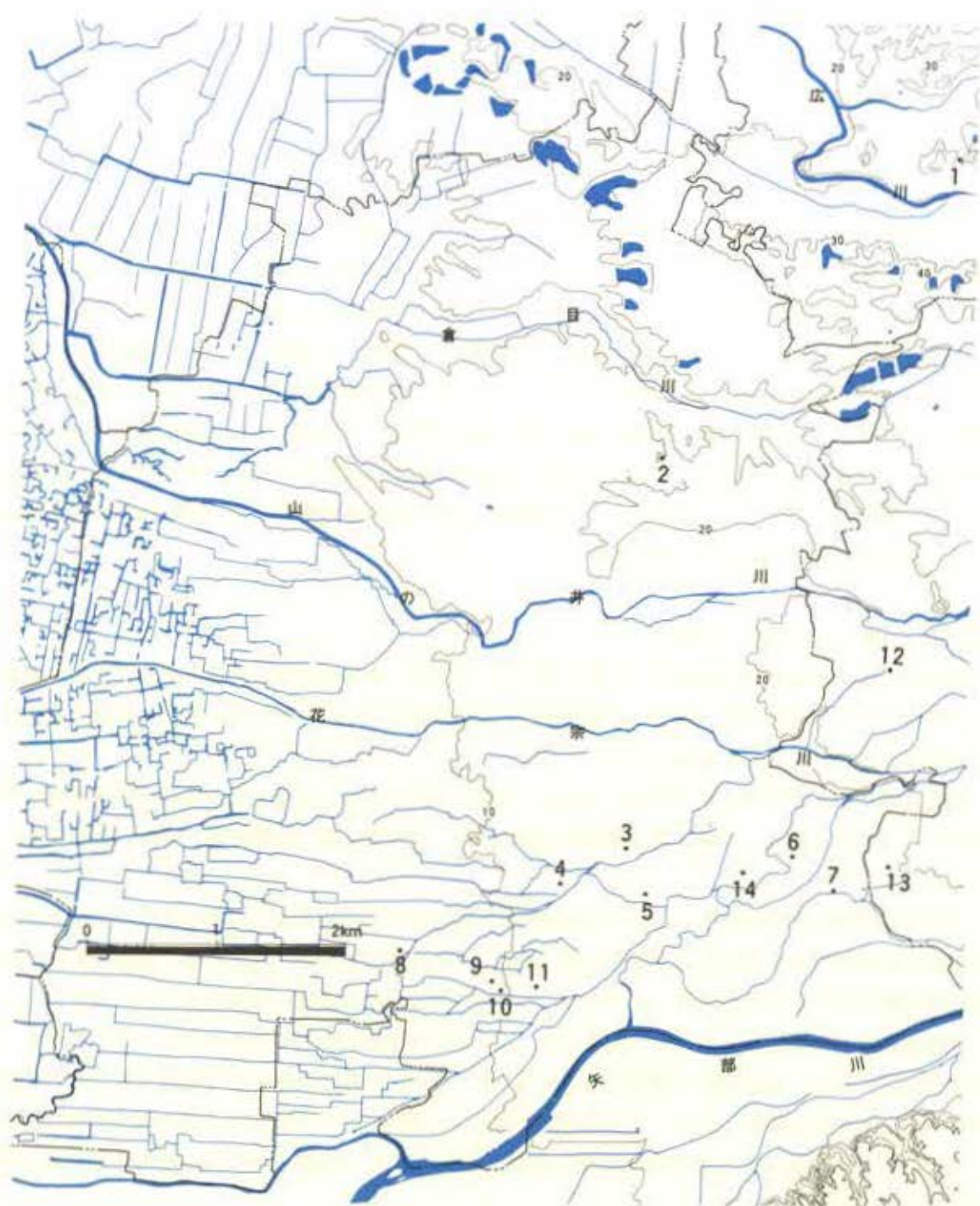
正式な発掘調査は昭和37年（1962）に筑後郷土史研究会の正式事業として行われた。途中八女市亀甲遺跡の調査のため中断があるが昭和38年（1963）8月に調査を再開、縄文早期の遺物の他に、弥生時代終末期の竪穴式住居が調査されている。この時の調査成果は前述の概報にまとめられている。

裏山遺跡はその後史跡公園として整備され、竪穴式住居の復元なども行われた。しかしながら、周辺の宅地化に伴い、地域住民の要望により平成2年（1990）通常の公園として整備され、その後保安面を考慮して街灯が設置された。上北島裏山遺跡第2次調査とされるものはこの公園化の際に行われた遺跡の状況を確認するための緊急調査であり、『筑後市史』に掲載されている遺物もこの時に採集されたものである（Fig.70）。

裏山遺跡出土の押型文土器は志遺跡群で採集された押型文よりも精緻な紋様が施されているように見受けられるが、2次調査で採集された資料はその数量が少なく、結論づけるには問題が残る。今後の地域史の解明のためにも昭和30年代に行われた第1次調査の正式報告がなされることが期待される。

2) 大地田遺跡

筑後市大字久恵字大地田に所在する。調査は昭和45年（1970）九州縦貫自動車道の建設に伴い、福岡県教育委員会により実施された。ここは黒曜石の分布地として調査対象地に上げられていたものである。調査の結果埴田文土器2点（Fig.71）が出土している。調査を行った福島邦宏氏の報告によれば、これらは矢部川氾濫時の混入品とのことである。



(承認番号 平 12九複。第69号)

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 比川平原遺跡 | 2 前津中ノ玉遺跡 | 3 鶴田牛ヶ池遺跡 |
| 4 栗山遺跡 | 5 鶴田厚沢遺跡 | 6 久恵中野遺跡 |
| 7 大地田遺跡 | 8 常所長田遺跡 | 9 志西田遺跡 |
| 10 北西野々遺跡 | 11 志麻田遺跡 | 12 緑針遺跡 |
| 13 大坂田遺跡 | 14 新清田遺跡 | |

Fig.68 筑後市周辺の縄文早期（石組埴・押型文土器出土）遺跡位置図 1 (S=1/50,000)

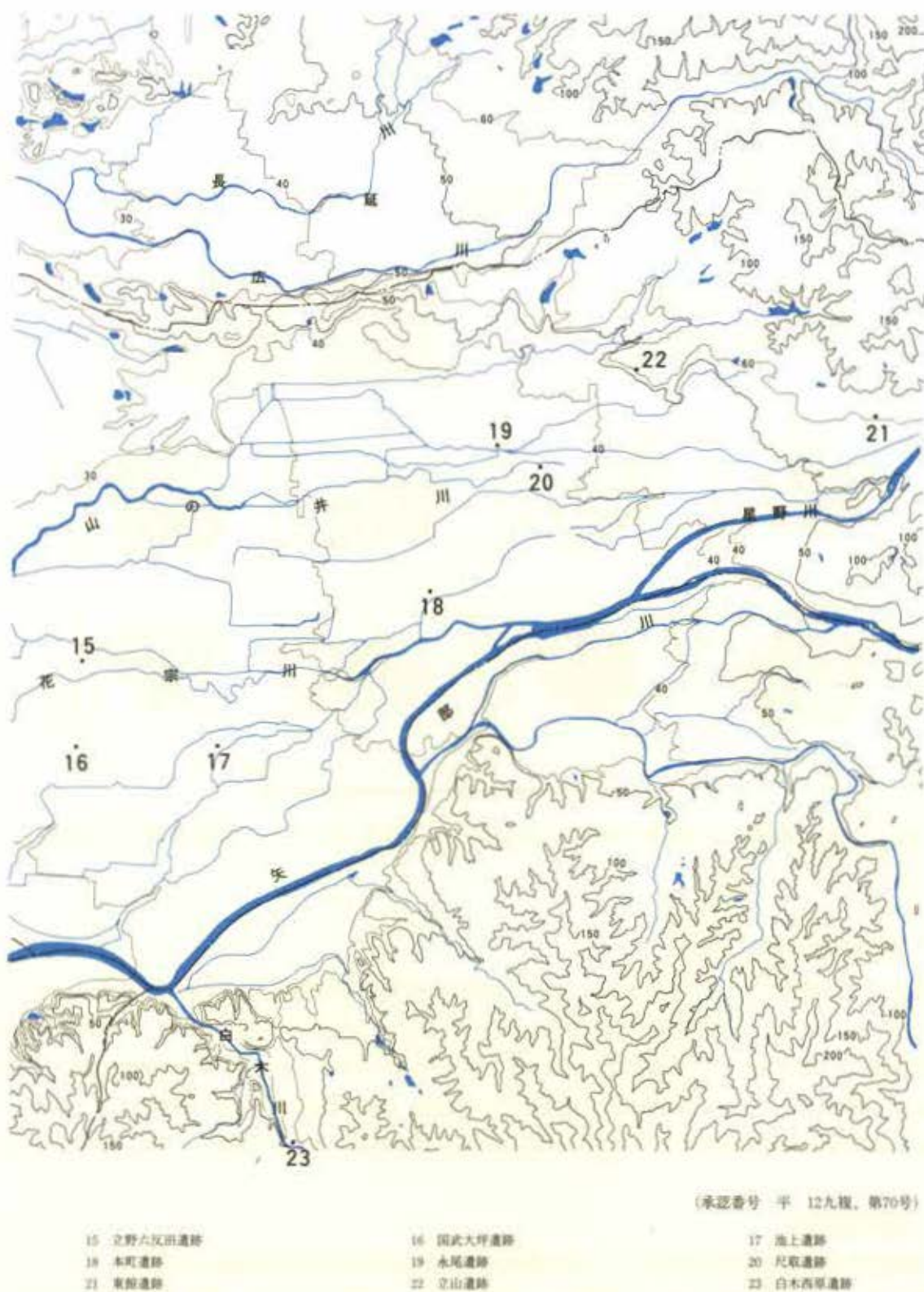


Fig.69 筑後市周辺の縄文早期(石組炉・押型文土器出土)遺跡位置図 2 (S=1/50,000)

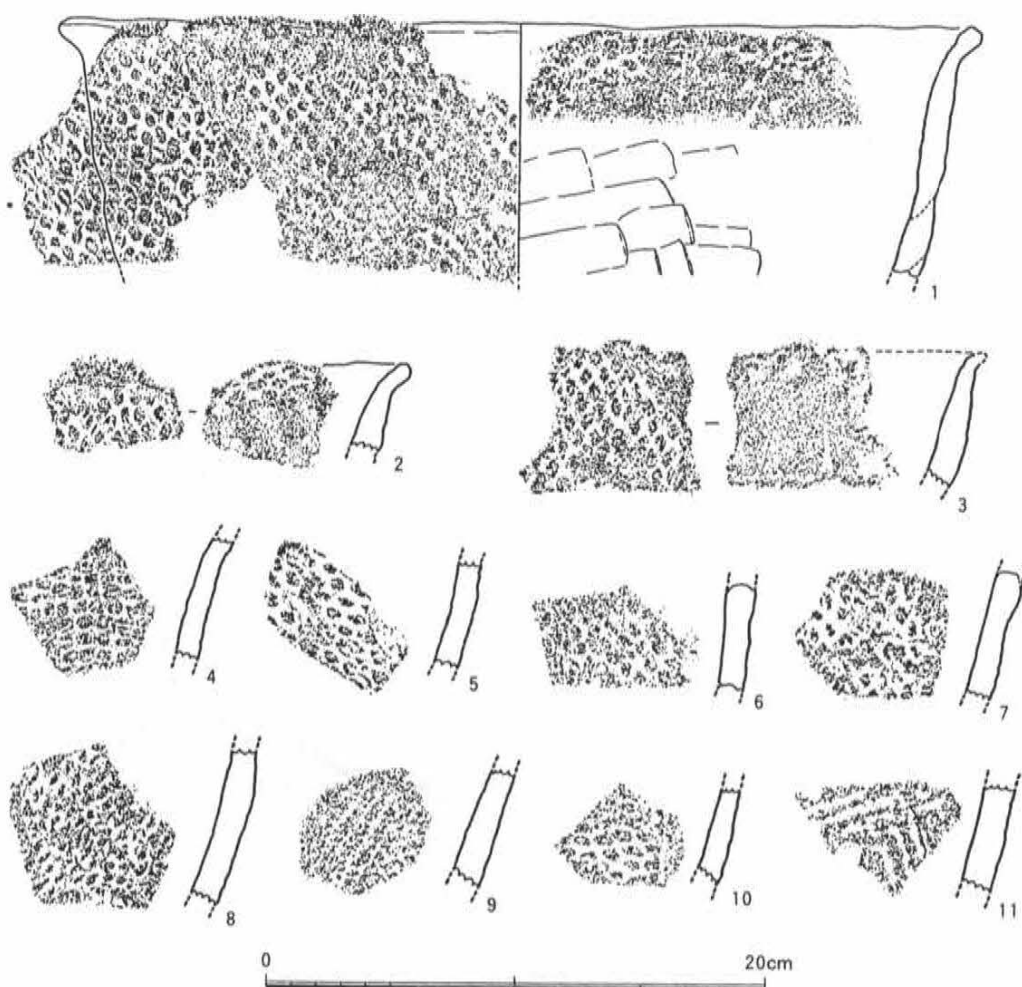


Fig.70 裏山遺跡（上北島裏山遺跡第2次調査）出土遺物（S=1/3・『筑後市史』より転載）

3) 新溝丸田遺跡

筑後市大字新溝字丸田に所在する。調査は県営圃場整備事業筑後東部地区の実施に伴い平成5年（1993）に行われた。この調査で縄文土器が4点ほど報告されている（Fig.72）が、石器とともに全て表土からの出土である。土器に関しては1点が早水台式とされているが、外面に縦走施文がなされており、時代はもう少し下るのではないかと考えられる。他の3点は志西野々遺跡のものに似通っており、同時期のものではないかと考えている。共伴石器は石鏃、削器、石核、2次加工石器がある。

4) 鶴田岸添遺跡

筑後市大字鶴田字岸添に所在する。県営圃場整備事業東部地区に伴い実施されることとなった。調査は4次にわたり行われたが、今回取り上げるのは第2次調査区である。第2次調査区は平成6年（1994）に調査が行われている。

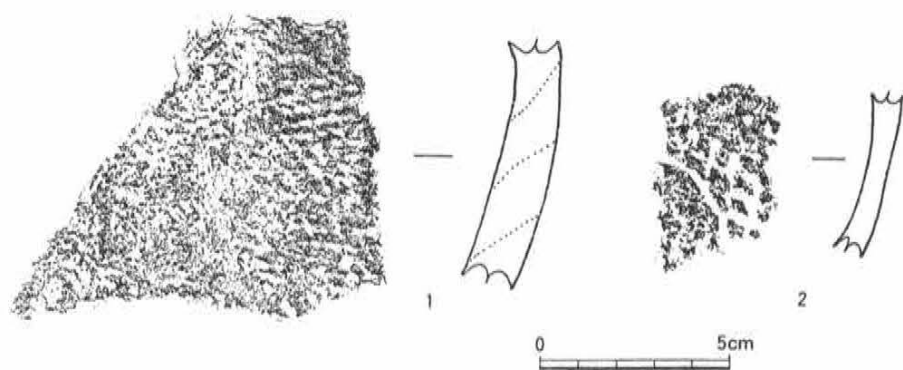


Fig.71 大地田遺跡出土遺物 (S=1/2・報告書より転載)

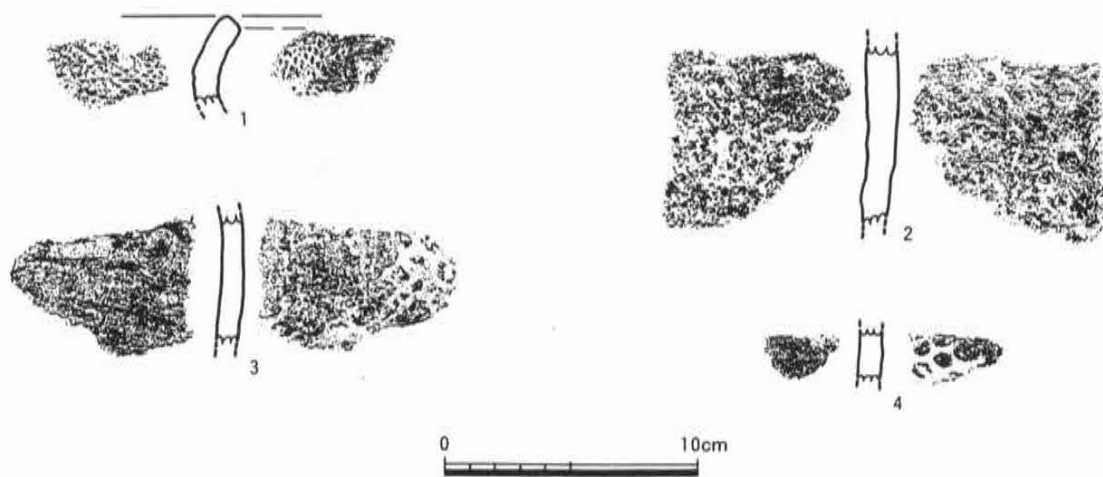


Fig.72 新溝丸田遺跡出土遺物 (S=1/3・報告書より転載)

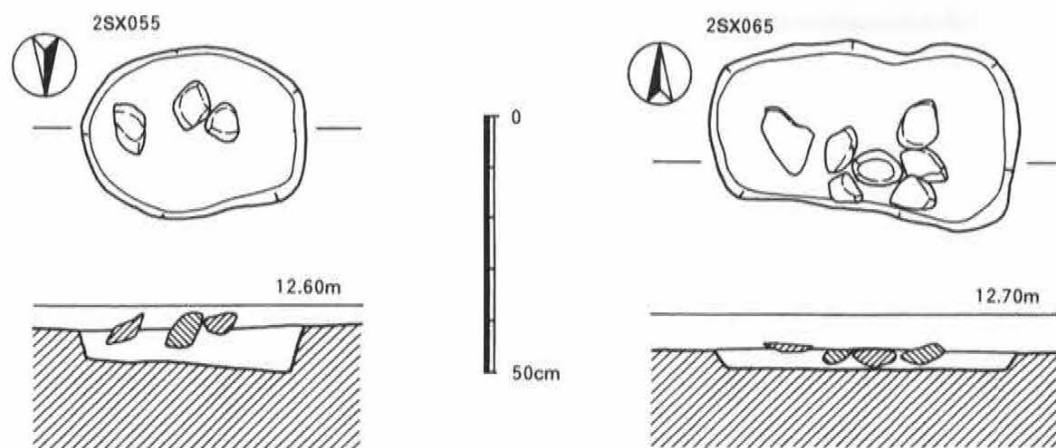


Fig.73 鶴田岸添遺跡第2次調査区焼石出土土壙 (S=1/15・報告書より改変・転載)

調査区の中で目を引くのは多数の落とし穴状遺構と弥生時代終末期の方形竪穴式住居跡である。ここに石組み炉と思われる焼石出土土壌が2基確認されている（Fig.73）が、報告書の中ではその位置が明示されていない。石組み炉と落とし穴状遺構がここまで近接して存在する例は市内ではここ以外には見られない。石組み炉は両者とも方形プランを意識したものと考えている。これらの遺構からは遺物は出土しておらず、周辺からも縄文時代早期を思わせる土器片、石器剥片などは出土していない。しかしながら、調査担当者はこれを縄文早期の遺構であると認識している。

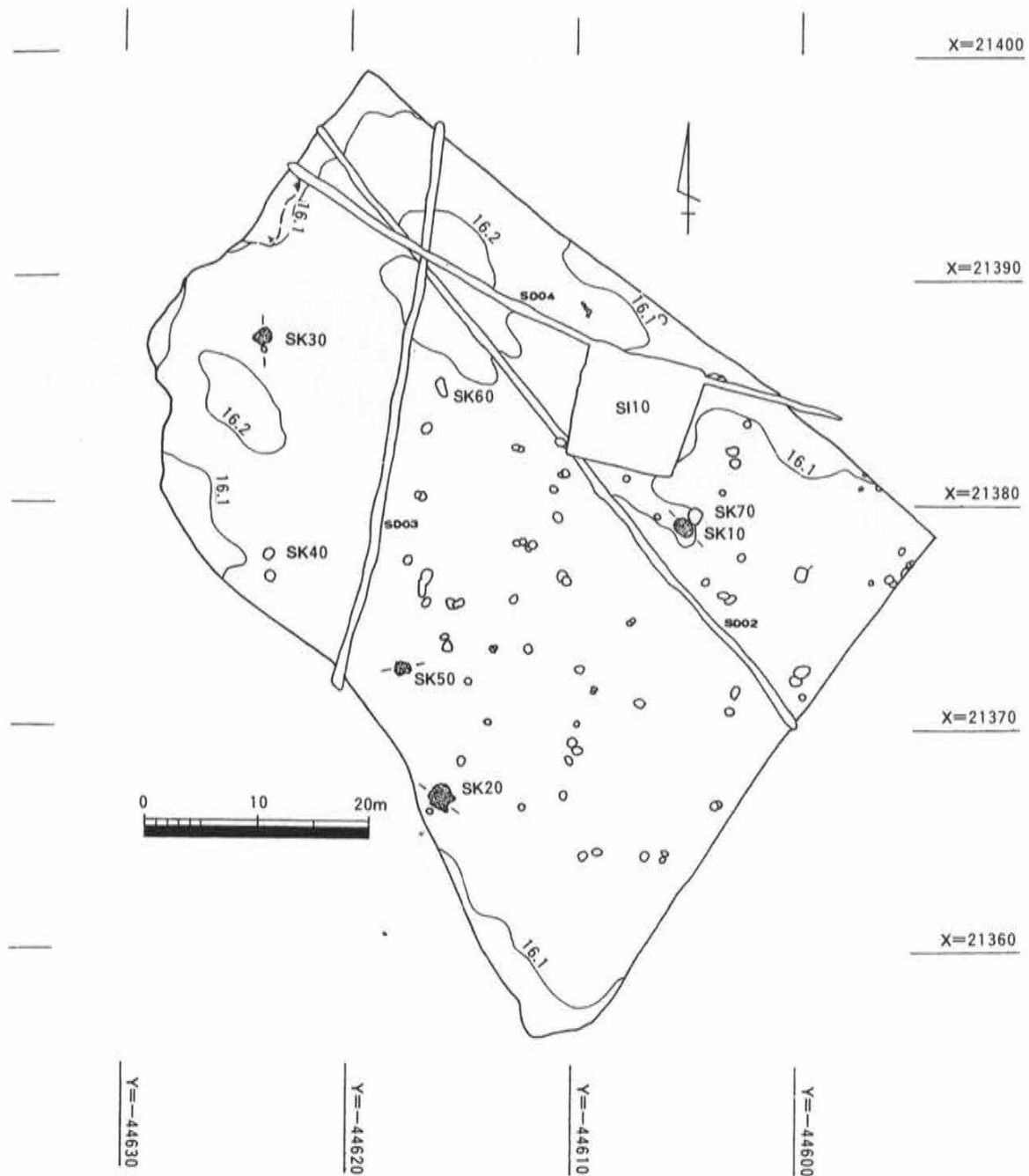


Fig.74 久恵中野遺跡B区 (S=1/600)

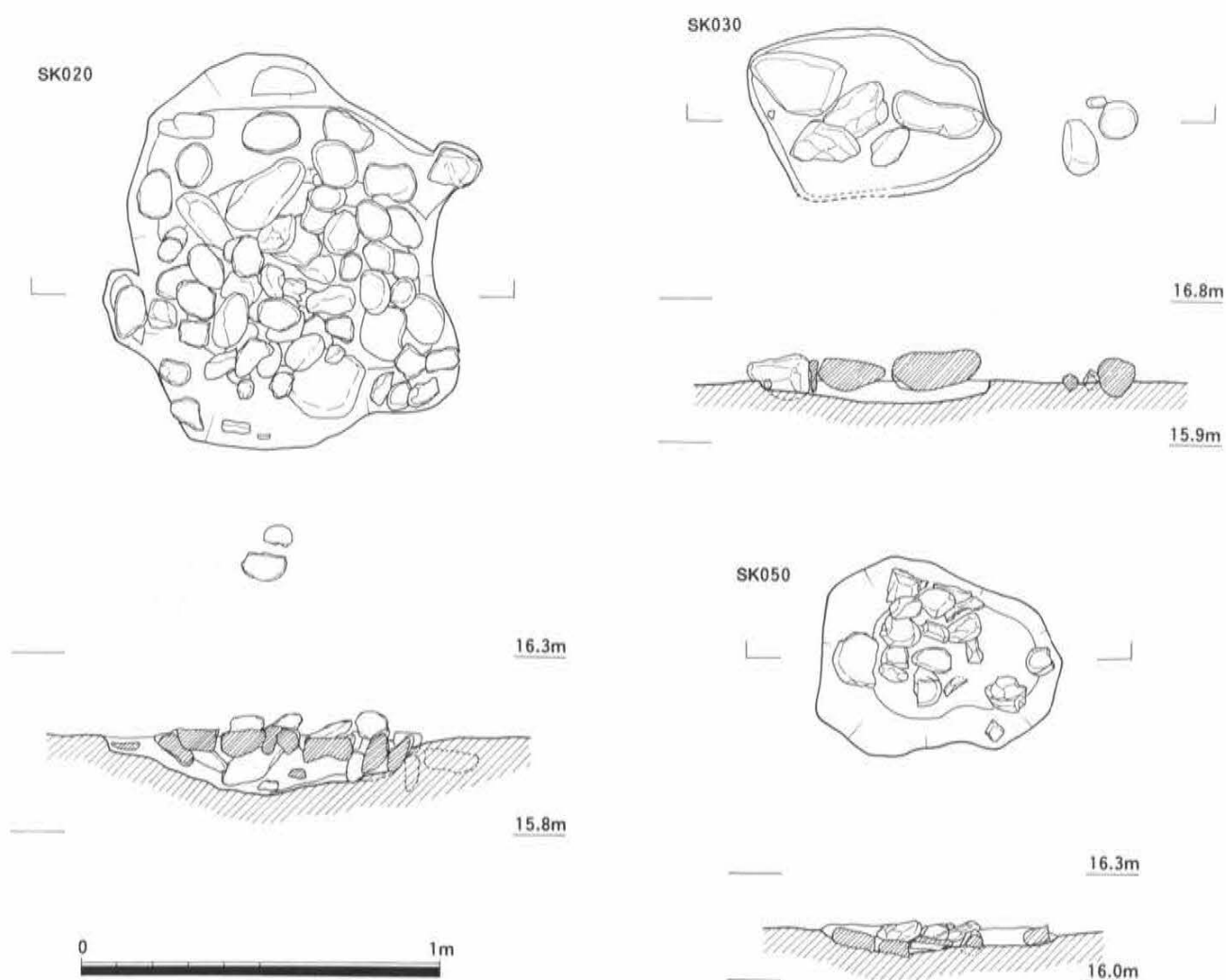


Fig.75 久恵中野遺跡B区石組み炉 (S=1/20)

5) 久恵中野遺跡 (Fig.74)

筑後市大字久恵字中野に所在する。県営圃場整備事業東部地区の実施に伴い平成7年(1995)に調査が行われた。調査はA区、B区の2カ所にまたがり、双方から石組み炉を検出している。現在調査担当者が不在のため、A区の詳しい状況は不明だが、B区で検出された石組み炉は確認しうる範囲では方形を基本としたプランを有している (Fig.75)。土器は未整理であるが、石組み炉の周辺から磨滅の激しい縄文土器が採集されている。調査担当者は縄文早期から前期という幅広い時期をこれに与えている。

6) 常用(北)長田遺跡

筑後市大字常用字長田に所在する。調査は2次にわたり、石組み炉は第2次調査区で検出されている。第2次調査は県営担い手育成基盤整備事業西部第2地区の実施に伴い平成9年(1997)にかけて行われている。遺構配置図や記録写真から方形プランを基本としたものと判断される。調査担当者の話によると、この遺構の時期を特定できるような遺物の出土は無く、使用されている石材は志遺跡群のそ

れよりも小さかったとのことである。

7) 前津中ノ玉遺跡

筑後市大字前津字中ノ玉に所在する。平成9年(1997)に行われた第2次調査では、縄文土器3点を出土した。この遺跡は市の中央部に位置する前津丘陵の標高約20m前後の高所に位置し、市の南部に位置する遺跡群とは異なる立地状況を有している。このような周辺よりも高い丘陵上に生活の痕跡を残している遺跡は近隣では八女郡広川町の広川平原遺跡(標高31m)、八女市の立山遺跡(標高60~80m)、山門郡立花町の白木西原遺跡(標高約40m前後)などを挙げることができよう。

縄文土器はいずれも押型文土器である(Fig.76)。SI040から採集された2点(1・2)は横走施文が施されており、志地区遺跡群のものよりも古い様相を有している。一方、遺構面を被っていた茶褐色土中から出土した1点(3)は志西野々遺跡出土のものに類似している。この調査では縄文時代の遺構として落とし穴状遺構が1基確認されているが、縄文早期のものとは言えないとのことである。

8) 志西田遺跡

筑後市大字志字西田に所在する。調査は平成10年(1998)に行われた。志西野々遺跡の北側に位置し、今回報告した縄文遺物包含層の周辺部にあたる。ここでは縄文土器のほかに落とし穴遺構が検出されている。縄文土器は志西野々遺跡のものと類似している。

9) 鶴田東牛ヶ池遺跡

筑後市大字鶴田字東牛ヶ池に所在する。調査は平成10年(1998)に2回実施された。筑後市の南西部、志遺跡群の北東に位置し、標高約14mの微高地上に位置している。

第1次調査区では遺物包含層から黒曜石剥片などと共に押型文土器が出土した。

第2次調査区からも押型文土器が出土している。

10) 鶴田牛ヶ池遺跡

筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在する。調査は平成10年から11年(1998~1999)にかけて調査が行われており、調査回数も5次に及んでいる。鶴田牛ヶ池遺跡は志遺跡群の北東側に位置し鶴田東牛ヶ池遺跡と隣接する、標高約14m前後の微高地上に立地している。

第1次調査区では石組み炉と押型文土器、石器を検出している。

第3次調査区では押型文土器と石器を検出している。

第4次調査区においても縄文時代の土壌、縄文土器、石器などが見られた。

第5次調査では集石遺構、押型文土器片、黒曜石片、サヌカイト片が採集されている。

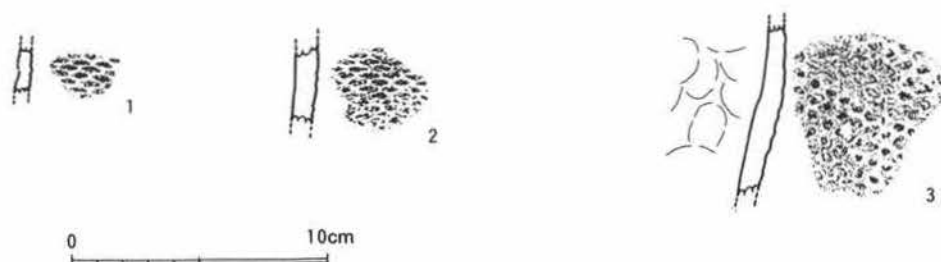


Fig.76 前津中ノ玉遺跡第2次調査区出土遺物(S=1/3・報告書より転載)

縄文早期の遺跡群から出土する押型文土器は、細片ばかりでその形式などを特定するには至らないが、確認できた範囲だけで述べるならば斜走施文のものが多く、早期後半に所属するものと考えられる。また何地点かで確認された石組み炉は、円形プランを持つものと方形プランを持つものの2つに大別されるが、整理作業途中の遺跡が多く、土器を比較検討できなかった。ためにこのことが時期差を持つことを示すものなのかは結論がでない。このことに関しては今後も検討してゆきたい。

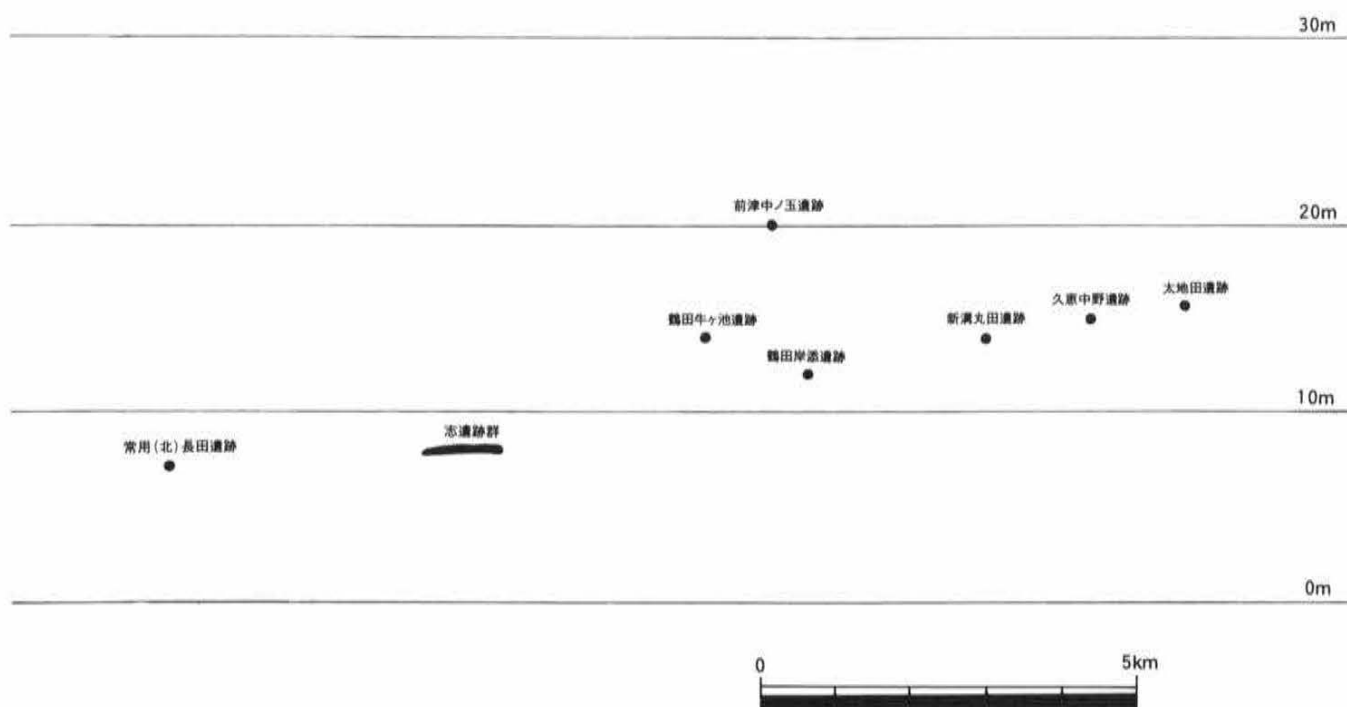


Fig.77 筑後市内縄文早期遺跡位置模式図

【参考文献】

- | | | |
|-------------|---------------------------------|---------------|
| 岩崎 光 | 『裏山遺跡調査概報』 | 筑後市教育委員会 1966 |
| 副島 邦弘他 | 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅰ』 | 福岡県教育委員会 1970 |
| 栗原 和彦他 | 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅱ』 | 福岡県教育委員会 1971 |
| 西谷 正 他 | 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅲ』 | 福岡県教育委員会 1972 |
| 佐田 茂・伊崎 俊秋他 | 『立山山古墳群』 | 八女市教育委員会 1983 |
| 赤崎 敏男他 | 『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報』 | 八女市教育委員会 1989 |
| 鹿田 昌宏他 | 『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 2』 | 八女市教育委員会 1990 |
| 赤崎 敏男他 | 『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 3』 | 八女市教育委員会 1992 |
| 筑後市教育委員会・編 | 『筑後東部地区遺跡群 Ⅰ』 | 筑後市教育委員会 1994 |
| 伊崎 俊秋・水ノ江和同 | 『白木西原遺跡 Ⅰ』 | 立花町教育委員会 1994 |
| 筑後市教育委員会・編 | 『筑後東部地区遺跡群 Ⅱ』 | 筑後市教育委員会 1995 |
| 伊崎 俊秋他 | 『白木西原遺跡 Ⅱ』 | 立花町教育委員会 1995 |
| 大塚 恵治 | 『県営農村活性化住環境整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ』 | 八女市教育委員会 1995 |
| 赤崎 敏男他 | 『八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報 2』 | 八女市教育委員会 1996 |
| 赤崎 敏男他 | 『八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報 3』 | 八女市教育委員会 1997 |

筑後市史編さん委員会編
上村 英士
柴田 剛

『筑後市史』
『前津中ノ玉遺跡 Ⅱ』
『ちくご遺跡だより Vol.12』

筑後市史編さん委員会 1998
筑後市教育委員会 1999
筑後市教育委員会 1999